チェルヌィシェフスキーの歴史哲学（Ⅲa）

武井勇四郎

ヘーゲル哲学は30年代末スタンケウィッチ会を捉え，それをヘーゲル熱病集団に一時仕立てた。間もなくヘーゲル哲学解体の左派をなしていたフォイエルバッハの『キリスト教の本質』はその熱病に一斗の冷水を浴びせかける恰好となり，40年代中頃の先進的インテリゲンチャは皆青年ヘーゲル左派の精神に靡いた。チェルヌィシェフスキーがペテルブルグ帝大に入学する以前からこの精神で書かれたベリンスキー，ゲルツェン，バクーニンらの著作がいくつか発表され一種のヘーゲル左派の精神が支配していたので，彼はこの精神で哲学的思考を開始したのである。彼は改めてフォイエルバッハの基本的著作を丹念に読むことでこの左派の精神を再確認し，彼の人間学を今後の学問の基本的原理として認定した。ロシア哲学思想史の流れの中でヘーゲル哲学の変貌を考えるなら，彼はヘーゲル哲学解体のロシアの先駆者の作業を引き継ぎ，それをいくつかの面でラジカルに終結させる大役を果すと同時に，ドイツ青年ヘーゲル左派と一風変った方向で成果を収めていると言える。彼の『芸術と現実との美学的関係』はヘーゲルの芸術哲学（美学）の解体の一大成果であるし，またこれから論題の対象とする注目すべき論作『共同体所有に反対する哲学的偏見の批判』はヘーゲルの歴史哲学の解体の無視しがたい成果である。この芸術哲学と歴史哲学は共に彼が崇拝していたフォイエルバッハに欠落していた部門である。この欠落部門をまさしくフォイエルバッハの人間学的唯物論で補完しようとしたのがチェルヌィシェフスキーである，この意味で彼はヘーゲルの美学と歴史哲学の継承者であると同時にラジカルな変容者であったとしなければな

らない。チェルヌィシェフスキー自身これらのことを自覚していたことが『ロシア文学のゴーゴリ時代概要』と『芸術と現実との美学的関係』第三版序文（1888）の中にはっきりと読み取れる，つまり前著の第六論文によればロシアの哲学はシェリング哲学の受容からヘーゲル哲学の心酔を経て，フォイエルバッハの人間学の支配に至り，ゲルツェン，ベリンスキー，バクーニンらがヘーゲル哲学の思弁性をフランスの実践（革命）やロシアの現実生活と融合させて，新たに生活の学 наука жизни を創始したが，これは現実的な生活を何よりも重ずる生活のための哲学であり，哲学は元来そうあるべきだったのである。そして第三版序文の著者が言うには，科学的思想を形成しようとしていた自分はフォイエルバッハの基本的思想を美学の根本問題の解決に適用して，当時支配していたヘーゲルの観念論美学を倒壊し新たな芸術哲学の確立を目指していた。更にフォイエルバッハが手をつけなかった論理学，歴史哲学，道徳哲学，社会哲学を補完しようと努めていた，と。後述することになるが，チェルヌィシェフスキーはこの論理学の部門を除いて，この四部門に一応手をつけそれなりの論作をものした。チェルヌィシェフスキーはまず初めにベリンスキーの作業を承けて，芸術哲学の確立を図りそれを博士号請求論文として完成したが，ロシアの差迫した社会的事情に促されて，何よりもまずロシアの歴史哲学を提示することを余儀なくされた。これは共同体論争と不可分であった。まさしく『共同体所有に反対する哲学的偏見の批判』（1858）こそこの課題への哲学的解答であった。さてこの論文の分析に先立ってチェルヌィシェフスキーがヘーゲル哲学の何を受容し何を批判したかから始めよう。

彼は学生時代から学位請求論文を書き上げている頃までにヘーゲルの『法哲学』『美学』や右派のミヘレットの『ドイツの哲学体系の歴史』（1837～39），左派の美学者 F. T. Vischer の „Über das Erhabene und Komische“ (1837), „Ästhetik oder Wissenschaft des Schönen“ 4Bd (1847～57) 等を通して一応ヘーゲル哲学に精通した，その上，ドイツにおけるヘーゲル哲学の解体過程に詳しく，右派，中央派，左派の色調を色分けし，とりわけ左派フォイエルバ

ッハの哲学が先験的形而上学的体系と全く異質の人間学でその後のドイツの哲学の流れを形成するものであると見た。チェルヌィシェフスキーの位置付けと性格付けによれば，ヘーゲルはカント，フィヒテ，シェリングのドイツ形而上学体系の最後にして且つ最も偉大な思想家，存在の全部門を支配下におき，生活の個々の領域における自然および歴史の諸法則と弁証法的発展の独自の法則との同一性を開示し，宗教，芸術，精密諸科学，国法と私法，歴史，心理学の全事実を体系的統一性という網によって包摂している思想の，並々ならぬ力と高尚さをもつ思想家である。つまり，理念が自己展開する中で万物万有を産みだし，個別に至り自己自身の理念のもとに立ち戻ってくるという弁証法的自己開示過程を説いた先験的哲学の完成者であった。ヘーゲルは哲学を抽象の学にとどめ，概して白髪の賢者の公正さでもって万物万有を語り，生活の波に無縁な書斎人の眼で専ら万物万有を考察した哲学者で，現実的地上的生活と自然科学に基礎を置いていたフォイエルバッハと比べるなら，形而上学的先験性とスコラ的形式が著しかった。しかし，彼は先行者シェリングから出発して万有を貫ぬく法則としての理念の弁証法的法則を細緻に仕上げた。チェルヌィシェフスキーはヘーゲル哲学体系の内的自己矛盾を看破し，それを剔抉してこう述べる，――ヘーゲルは不徹底であった，一歩毎に自己矛盾を来たした。彼の諸原理を採り入れれば，首尾一貫した思想家なら，その諸原理によって抽き出された諸結論と全く違った諸結論に至らねばならない。……ヘーゲルの諸原理はきわめて強力で広量だ，諸結論は狭量で無力だ。彼の絶大な天才ぶりにも拘らず，偉大な思想家は一般的観念を表明する力をもっていたものの，たゆまずこれらの基礎原理を堅持し，且つこれらすべての必然的帰結を論理的に展ずる力はいまだ十分でなかった。彼は真理を予知はしたが，最も一般的で，抽象的で，全く無規定な輪郭においてにすぎなかった。目前に真理を見ることは既に次の世代の役目にはほかならなかった。そして彼は自分の諸原理から諸結論を抽き出せなかった，諸原理そのものが未だ彼には明晰でなく，暗かった。……ヘーゲルは今日にあってはもはや歴史に属する，現代は別の哲学をもってい

る，そしてヘーゲル体系の欠陥を良く見定めている。しかし，誰しも賛成しなければならないが，ヘーゲルによって創り出された諸原理は，まことにもって真理に近かった，真理のいくつかの面はこの思想家によって渾身の力でもって注目された。これらの真理のうちで，ある発見はヘーゲルの個人的功績に帰するものであり，他のものは彼の体系にでなく，カントとフィヒテの頃からドイツ哲学全体に帰するものと言える。ヘーゲル以前に，彼の体系における如くかくも明白に定式化し，かくも力強く明言した人は誰れ一人いなかった，と。このようにチェルヌィシェフスキーはヘーゲル哲学の矛盾，二重性を，その体系の諸原理 принципы とその体系の諸結論 выводы との自家撞着，精神と内容との撞着 разноречие と見た。彼が言うところの「諸原理」とは弁証法的思惟，あるいは理念の自己発展と開示の弁証法的方法と読み直すことができよう，そしてその「諸結論」とはヘーゲルの完結完了した保守的な体系，ないしは学の最高形態としての宗教哲学，プロイセン国家の護教となった『法哲学』，プロテスタント的ゲルマン世界で終焉した『歴史哲学』と見ることができよう。彼の深い炯眼で見るところでは，ヘーゲル体系の内容はその体系に貫ぬいている弁証法と全く不照応であり，むしろこの弁証法を貫徹すれば，もっと革命的な結論が自ずと論理的に帰結するはずなのである。しかし，「内的矛盾 внутренное противоречие」そのものが，彼によれば，ヘーゲルの「天才的弁証法」をこの上もなく隠蔽してしまったのである，これがためロシアのヘーゲル心酔者には，「現実的なものは理性的である」のテーゼが「思惟の弁証法」の論理的必然的帰結であるかのように映ったのである。ベリンスキーが一時この幻惑にかかったことは有名な事実である。またチェルヌィシェフスキーはこのヘーゲル体系の保守性とプロイセン国家（立憲君主制）との癒着関係を，色々な論文の中で断片的に衝いている。『法哲学』は既に学生時代に，独創性にとぼしく，思想の大部分は鋭さを欠き中庸で斬新さに息づいていず，細部にわたってヘーゲルは現状事物の，現在の社会制度の奴隷である，と酷評されている。また『哲学の人間学的原理』（1860）の中では彼の哲学の党派性があばかれ

る，――ヘーゲルは穏健な自由主義者でその結論において極度に保守的であるが，ウルトラ反動との闘いでは革命的諸原理を採用したが，彼の希いは革命的精神の発展を防ぎとめることであった。……王政復古期の世論を支配し第一帝政の時代に端を発する精神によってつらぬかれているヘーゲルの体系は，それ自身すでに現在の知識に適さなくなった。……ヘーゲルはその人柄からくるのか，あるいは計算づくの上でか，政治的および神学的事柄について語る場合には，彼の諸原理にはなはだ保守的衣裳をつけた，と。このようにチェルヌィシェフスキーはヘーゲルの「諸結論」を新たな時代の要求に合致しない保守的イデオロギーとして拒けたが，事物の「諸原理」としての弁証法的思惟，ないしは思惟の弁証法に対しては高い肯定的評価を与えた。彼の見るところによれば，ヘーゲルは当時イギリスやフランスに支配していた経験論的思惟方法を客観的必然性のない恣意的性格をもつ「主観的思惟」とし，自らは，全存在の運動法則を理念の発展過程の法則と同一とする客観的な「思惟の弁証法」を打ち立てた。この弁証法は，彼の解するところではこうである，――この本質は次の点にある，思想家は何か肯定的結論に安んじてはならない，むしろ，彼が思惟している対象の中に一見してこの対象によって表象されるものと対立する性質と力がないかを探求しなければならない。こうして思想家〔ヘーゲル〕は対象を全面から概観することを余儀なくされた，そして真理は彼には，ありとあらゆる対立した諸意見の闘争の結果以外のものとして現われなかった。この方法によって，従来の一面的な対象についての諸概念の替りに，少しずつ完全な，全面的な研究が現われた，そして対象のすべての現実的な性質についての生きた概念が構成された。現実性を説明することが哲学的思惟の本質的義務となった。ここから，以前にはとことんまで考え抜かずに得手勝手に自分自身の一面的な偏見によって有利な方にねじまげていた現実に対して，特別の注意が向けられた。こうして真理の真面目な，倦まぬ探求が，従来の気儘な解釈にとって替った。しかり，現実においてはすべては事情に，時と場所の諸条件に依存している，――従って，ある対象が発生したその事情や原因を考

察せずに人々が善や悪について述べた従来の一般的言辞は，つまりこれらの一般的抽象的格言は不満足なものだったと認めた。各々の対象は，それ自身の意義をもっている，そしてその意義が存立する事情に応じて対象を判断しなければならない。この規則は＜抽象的真理はない，真理は具体的である＞という定式で表現された，つまり，事実が依存しているすべての事情を考察した上で一定の事実についての明確な判断を下すことができるにほかならない，と（傍点—引用者）。周知の如くヘーゲルの哲学は客観的観念論である以上，弁証法は思弁性を帯びざるを得なかった。チェルヌィシェフスキーはこの思弁性のことを「先験的アプリオリ性 трансцендентальная априоричность」と呼び，それを剝奪しようと努めた，つまり元来弁証法は「対立した諸意見の闘争」，対話の中で成立するロゴス（理性，言語）の法則であるが，これを万物万有（自然，社会，歴史）の実在的（リアル）な運動法則一般に換質・換位を行った。チェルヌィシェフスキーの評によれば，ヘーゲルは真理についての抽象的概念を創ることを唯一の目的にしたが，この概念と現実的生活との関係は二次的位置におかれたり，不問に付されたりした，と。確かに，ヘーゲルの哲学にあっては，絶対理念（神）の自然，精神，理性，理念への契機的自己顕現と自己運動の法則が弁証法である点で，弁証法は普遍的，遍在的形式をとっているが，つまるところ存在と思惟が同一である以上，客観的観念論のもつ神的な，形而上学的，先験的性格を帯びざるを得なかった。チェルヌィシェフスキーがフォイエルバッハの哲学に拠っていた以上，ヘーゲルの先験的「思惟の弁証法」に思弁性のない地上的現実的性格をほどこさざるを得なかった。フォイエルバッハによってヘーゲル哲学の形而上学的先験性の形式は，主客の顚倒をうけて放擲され，哲学は地上的人間学となる，神ではなく人間が至上的存在となる。しかし，ヘーゲル哲学なくしてはフォイエルバッハの哲学は産まれなかった。チェルヌィシェフスキーはこの点についてこう述べる，——この〔ヘーゲル〕哲学によって創られた諸成果に助けられて，科学は……前進した。しかしこの新しい学〔フォイエルバッハの人間学〕は，常に歴史的意義を保持しているヘーゲ

ル体系の更なる発展として，抽象の学から生活の学 наука жизни への移行としてのみ現われたにすぎなかった，と。この「生活の学」への移行にも拘らず，フォイエルバッハにおいてどれほど弁証法が確保されかは疑とするに足る。ゲルツェンの次の一文はヘーゲル弁証法のロシア的有り方を示している，――モスクワにおいて社会主義はヘーゲル哲学と並行して進んだ。現代の哲学と社会主義との同盟は理解しにくいものではない。それにしてもドイツ人達はやっと最近になって科学と革命との連帯性を承認したのである。……ドイツ人達は学問において極めてラジカルであったが，行動においては保守主義者であった。……我々ロシア人は反対に二元論には好感がもてない。我々にとって社会主義は哲学の最も自然な三段論法であり，国家への論理学の適用であると思われた（『ロシアにおける革命思想の発達について』(1851)）。ゲルツェンのもっと有名な表現を用いるなら，「弁証法は革命の代数学である」。弁証法を社会主義や革命に直結するというロシア的性急さはあるにしろ，弁証法はロシアの社会・政治的変革の理論の中に組みこまれてきた点でフォイエルバッハの哲学の水準を超えていた。チェルヌィシェフスキーにおいても，ヘーゲル哲学と社会的実践とを融合する新しい作業は続くのである。前述したように，フォイエルバッハは絶対理念の学，つまり天上の神学を地上の人間学に顚倒せしめることに力が尽き，論理学，美学（芸術哲学），道徳哲学，社会哲学，歴史哲学の各々の部門で新たなる学の成立に手が廻らなく，それらが放置された。このフォイエルバッハの欠落部門を埋め合せようと意識していたのがほかならぬチェルヌィシェフスキーである。彼は論理学を除いて，彼なりのスタイルでロシアの内的要求に合せて思考した。芸術哲学は『芸術と現実との美学的関係』(1855)，道徳哲学は『哲学の人間学的原理』(1860)，社会哲学は『資本と労働』(1860)，『ミル「経済学原理」露訳とその評言』(1860～61）に各々結実を見ている。歴史哲学は『共同体所有に反対する哲学的偏見の批判』（1858）に，いわゆる「歴史哲学」の形で集中的に表現されるが，チェルヌィシェヘスキーの活動の全容から概観するなら，彼の二大部門は芸術哲学と歴史哲学である。従っ

て，続論でも詳述することになるが，道徳哲学と社会哲学は歴史哲学の一環として歴史哲学に組みこまれるわけである。ともかく差し迫った農奴解放というロシアの運命の帰趨を決する重大事に促がされて，ロシアの歴史の哲学的考察を余儀なくされた。フォイエルバッハが1848年の革命に無関心であったのと違い，チェルヌィシェフスキーは来る1861年に積極的に取りくんだのである。ヘーゲル哲学の変容とその批判に立って，事後においてでなく，事に先立ってロシアの歴史の運行を解明しようとしたのである。

ここで問題の論文『共同体所有に反対する哲学的偏見の批判』の分析に深入りして，チェルヌィシェフスキーの歴史哲学とヘーゲル哲学との深いつながりと異質性を考察しよう。彼の問題意識はこの論文の表題通り，共同体的土地所有に反対する自由主義的改革主義者一般の弁証法をわきまえない哲学的無知を匡正することであった。彼によると共同体的所有に反対する誤まれる＜偏見＞は二つあって，一つは laissez faire, laissez passer を唱導する俗流経済学に発する経済学的偏見であり，他は万物万有の一般運動法則の無知からくる哲学的偏見である。よって『……哲学的偏見の批判』(1858 No.12) は，経済学的偏見を批判した『経済活動と立法』(1859 No. 2) と対論文をなすもので，いずれも共同体論争の中でものされたもので，既に1857年の論壇月評で提示した諸問題を哲学と経済学の二面から掘り下げて，共同体論争に結着をつけようと狙っていたものである。その上，この『……哲学的偏見の批判』が『哲学の人間学的原理』に，『経済活動と立法』が『資本と労働』にそれぞれ収束する傾向をもっているので，チェルヌィシェフスキーの第三期の活動の中で看過できない位置を占めているものである。後者の社会哲学に関する諸論文と歴史哲学との関係については続論に譲ることにして，早速『……哲学的偏見の批判』の内容に入ろう。

この論文の中で扱われていることは二つの事柄である，一つは万物の発展の一般法則，他は発展の各段階を飛躍するか短縮する論理の可能性。この二つの

事柄によって，彼は共同体的所有の歴史的必然性を論理的に証明し，且つロシアが資本主義的生産様式を短縮して組合的共同体に移行可能であることを，これまた論理的に証明しようとした。よって彼自身がことわっている如く，論文のスタイルは理論的，純論理的抽象的性格を帯びている。

まず第一の論題から始めよう。彼によると，シェリングによって発見され，ヘーゲルにおいて精確且つ精緻に仕上げられた思想は，〈形式からすれば発展の最高段階は，それが開始された最初の始元と類似している〉，彼の別の表現によれば〈発展の最高の段階は，形式からすればその始元に戻ることによって成立する。形式の類似において最後の内容は最初におけるそれよりも測り知れないほど豊かで高い〉という思想である。この思想を彼は人類が文句なしに認めなければならない万物の運動一般の原理，一般法則，一般規範，数学的公理にも匹敵する公理であるとした。この公理は指摘するまでもなく形式と内容の弁証法である。そしてその萌芽は，彼の指摘の通り，シェリングの自然哲学の生命の自己運動の見地である。ここでシェリングについて触れておけば，彼の初期の著作は自然哲学で占められている。――『自然哲学論考』(1797)，『宇宙霊について』(1798)。シェリングの生命の哲学によれば，自然は無機的自然から有機的自然に発展するが，これは理性が無意識的形式をもった生活から意識的形式をもった生活に発展していくいわば生成する精神の歴史とみることができる。自然は生成する過程であり，自己認識に至るを目的とする，いわば自己目的を実現する理性の歩みである。彼は，自然の生成する精神の歴史全体の中の根底に統一的な根本形式，同一の普遍法則が横たわっていることを説いた。「自然は生成する叡知」であり，「自然の哲学は生成する精神の歴史」であるというのが彼の根本観である。生命（生）は無自覚の理性が人間において自覚的意識に至るいわば衝動である。そしてこの普遍的生命の原動力を，引力と斥力の二元性 Dualismus, 陽極と陰極の両極性 Polalität という対立性に彼は求めた，この面から言えば，彼の自然現象の捉え方は，まず分裂して，対立して，しかる後の相反する諸力の合一・綜合である。ここまでくれば自然の姿は理性

の発展の姿と同形写像となり，自然と精神の同一性が説かれ，絶対的同一者の観念論となる。つまり自然は理性に解消され，逆転して理性の所産となる。ヘーゲルの言う理念の自己疎外態としての自然観の一歩手前である。結局，シェリングの自然哲学は自然的観念論で終る。

シェリング哲学がロシアの1830～40年代に流入し，自然哲学が自然科学者や哲学者に，芸術哲学が文芸批評家に，啓示哲学がスラヴ主義者に大なり小なり影を落したことを想起する必要があろう。ロシア哲学はシェリング哲学の移植から始ったと言っても過言ではないのである。チェルヌィシェフスキーはシェリングの思想にかなり詳しかった。彼が丁度ジャーナリストとしてロシア思想界に登場した時はシェリングが世を去った時（1854）であった。これを機会に彼はシェリングの活動に論評を加えてその功罪を明らかにした。チェルヌィシェフスキーはシェリングを前期と後期の二期に分け，前期の自然哲学にかなりの評価を与え，後期の哲学はいままでの人類の全哲学と矛盾する単なる補足物以上のものでないと酷評した。前期の自然哲学にしてもその固有の先験的形式を拒否し，自然の諸法則の本質的統一性の概念と自然哲学の理論的先取りの役割を高く評価して言う，――概して，シェリングは自分の思想に対しての幻想にきわめて大きな支配権を与えるという欠陥から解放され得なかった。……彼と彼の後継者〔オーケンら〕は事実によっては精密に確証できない結論をしばしば下した。概して彼らは同時代の積極的〔実証的〕諸科学の状態よりもはるか前方に進みすぎた，これがためどうしても誤りを犯す羽目に陥らざるを得なかった。そしてしばしばつくりものの幻想的結論を下さざるを得なかった。しかし，それにも拘らず，言っておかなければなるまい，彼らの基本的志向――様々な自然界において様々な形式を取るにすぎない諸法則の本質的同一性を，全自然の中に見定める志向は，真理の分前をもっていた。そして今日の積極的諸科学は，一見して全く違った諸々の現象となって顕現する自然の諸力と諸法則が同一性をもつことを諸事実の研究から確証したので，〔彼らと〕同じような確信性を抽き出すことに成功した。……思想家〔シェリング〕の方が自然科

学者よりも先にこれらの結論〔自然諸法則の同一性〕を表明したし，現代ではいまだ達成されていない最高度の完全さと法則性をそれらの結論に賦与しようと欲した。従って彼らは自然科学者が犯したよりもしばしば誤りを犯した。しかしシェリングと他の思想家には彼らが一早く自分の見地を表明したという功績は残るのである。そして〔根本的〕思想を表明したので，万物万有の中に連関と本質的統一を開示しようとする志向は，精密な研究の成功に強く働いた，と（傍点――引用者）。つまり自然科学者（博物学者）は，電気，磁気，熱，運動力の本質的連関を認め，またリービッヒとその弟子も有機体と無機体における化学的諸法則（呼吸作用と摂取過程の法則）の本質的統一性を解明したが，シェリングがこれを先験的な哲学的形式で先取りしたというわけである。しかし，自然科学が諸部門において画期的成果を収め，フォイエルバッハの哲学がその成果に依拠していた以上，シェリングの，特に後期の哲学が「蒙昧主義のシンボル」と彼に酷評されるのも時代の推移であった。しかし，それにしても彼はシェリングの自然哲学の根幹をなす自然現象の統一性の思想には多大の評価を与えているのである。何故なら件の論文『……哲学的偏見の批判』の中で，自然哲学の影響下で生命力の発現として自然を認定していたF. H. A. von フンボルト（1769―1859）の『宇宙論』(1845―62)，内在する原始生命によって生物は進化すると見たラマルク（1744～1829）の『動物哲学』(1809)が援用されて，宇宙界，鉱物界，植物界，動物界の自然通史に，先きの定式＜形式からすれば発展の最高段階はそれが開始された最初の始元と類似している＞の発現が考察されているからである。また『哲学の人間学的原理』の前半で扱われている自然法則の統一性，人間有機体の統一性の思想には，シェリングの自然哲学の痕跡も認められなくはないからである。「自然の法則の統一性は，すでにふるく幾人かの天才によって理解されていた」という字句のこの「幾人かの天才」の中にシェリングも含まれていることは疑とするに足りない。このことによって筆者はフォイエルバッハのチェルヌィシェフスキーへの影響を決して軽視するつもりはないが，こと弁証法に関しては彼はフォイエル

バッハを筆頭に挙げていないからである，挙げられたのはヘーゲルとシェリングであった。

ヘーゲルがシェリングの二元性，両極性は論理的発展のモメントからすれば悟性的水準にとどまるものであることを指摘し，それを批判したことは周知のことである。言うまでもなくチェルヌィシェフスキーの先きの定式は，ヘーゲルが『論理学』の中で論述した弁証法的思惟のことである。ヘーゲルにあっては，論理的なものは理念，精神，理性，思惟の運動形式をとる。絶対理念は自然哲学，論理学，精神哲学の順に自らの発展の歩みを進めて自己自身の理念に還帰安住する。それは論理的には三つのモメントをもつ，1）抽象的モメントあるいは悟性的モメント，直接性，抽象性における思想，an sich の概念。これは最後のものではなくて有限なもの，極端にまでおしすすめると反対物に転化する始元的モメントである。2）弁証法的モメントあるいは否定的理性のモメント。これは反省と媒介のモメントで有限なものの否定と自己揚棄，反対物への移行，für sich の概念である。3）思弁的モメントあるいは肯定的理性のモメント，自己自らへの復帰で全く自己のもとにある思想，an und für sich の概念。これは対立した二つの規定の統一，対立した二つの規定の解決と移行とのうちに含まれた肯定的なものの把握。これは単なる抽象性，直接性への復帰ではなく成果ある具体的な統一的全体である。論理の運動は1）→2）→3）であり，これを単純化すれば，1）措定（テーゼ）→2）反措定（アンチテーゼ）→3）綜合（ジンテーゼ）の弁証法的，概念的運動である。この運動形式は，思惟と存在の同一性のため，自然，論理，精神の万有の運動形式となる。

チェルヌィシェフスキーにあってはこの運動形式のヘーゲル的思弁性が剝奪され，実的な発展史一般の形式ないしは法則，つまり自然史，人間歴史，文化史のそれとして，しかも自然の発展としての人間，人間の発展としての人間歴史，そこにおける人間精神・文化の発展のそれとして，一言でいえば通史の法則として唯物論的に再把握された。『……哲学的偏見の批判』の前半であらましこう述べられるのである。存在の最も抽象的形態は惑星のガス状態であり，

その凝縮が液体や鉱石である。ここから植物界が生じ，液体性は再び樹液の形式で復帰する，植物界の発展後に動物界が生じ固体性は骨格として再現しながら液体性の比重は血液，分泌等として増す，と同時に呼吸等のガス状態が宇宙のガス状態の再興として現出する。動物生命は外面的発達から内面的発達に移り，軟体動物から哺乳類に至り，最後に人間に至って頂点に達する。人間頭脳は頭骨につつまれているが中味は半液体のゼリーとガス状態の神経系であって，いわば固体性，液体性，ガス性の復帰である。最後の頭脳は自然史の総決算であって内容からすれば最高に豊かであるが，形式からすれば惑星的状態への復帰である。更に社会生活を例にとるなら，社会は最初小さい種族で各人はすべての事柄に能動的に参加する完全な自己管理体制であったが，種族が相互に連合し拡大するにつれ官僚的性格を強め最初の社会状態と対立した，つまり個々の行政区の利害は中央集権的行政によって圧迫された。しかしこのジンテーゼとしてアメリカ合衆国やスイスの如き地方と中央の統合が見られた，つまり地方自治と中央行政の統一であって，初期の自己管理体制の新たなる復帰である。同じことは言語現象にも，裁判制度にも，軍事制度にも，服装モードにも，貿易制度にも，株式取引制度にも，正義感にも言えるとして，彼は縷々説明している。こうしてチェルヌィシェフスキーは断言するのである，かくまで様々な事象に適用される一般法則が，こと，共同体問題にだけ適用不能であるはずがないと。彼がたてた一般法則の定式――＜普く，発展の最高段階は，形式からみて発展の中間段階での対立に取って替る始元の形式の還帰である。普く，内容の最も強い発展は，発展のさほど強くない内容〔中間段階〕によって拒否された同じ形式の再興に向う＞――を共同体問題に適用すれば，共同体的土地所有（テーゼ）→資本主義的私的土地所有（アンチテーゼ）→社会主義的共同体的土地所有（ジンテーゼ）が論理的に必然的に導出されるというわけである。即ち，彼によれば，先きの定式が万有引力や因果律の如き普遍性всеобщность をもつ公理である以上，ジンテーゼとしての共同体的土地所有は演繹的に導出できる帰結（結論）である。そして彼は自由主義経済学者らの共

同体に反対する哲学的偏見はまさしくこの公理の無知にあると断じた。

チェルヌシェフスキーの農民社会主義が誕生した当初（1857年論壇月評）にあっては，土地所有面からみた人間歴史の三段階が歴史運動の趨勢であると記るされていたが，これがシェリングやヘーゲルの哲学から出てくる帰結であるとは論ぜられず，むしろ共同体は「プロレタリアートの潰瘍」の防止策として要請されている向きが強かった。また『土地所有について』『ロシアの国内状態……』などではロシアの残存する共同体的所有の慣行，共同体的精神の優位性が，社会主義的共同体への移行に際して，強く意識され過大評価されていた。従って歴史の論理性は影を秘めていた。ところが『……哲学的偏見の批判』においては，専ら歴史の発展を論理的演繹的推論でもって説いたのである。従ってここで別の相貌をとったことは確かであり，しいて言えば，従来の「歴史哲学」の色調を濃くした。

以上が第一の論題である。これは一言で言えばヘーゲルの弁証法の共同体擁護への適用であって，当時のロシアのインテリゲンチャならば納得はいかなくても一応察しのつく事柄であったと思われる。もしチェルヌィシェフスキーがこれだけのことしか『……哲学的偏見の批判』のなかで論述しなかったとするなら，この論文は何の変哲もない平々凡々なものに終っていたろう，何故ならロシアの啓蒙主義的歴史学者グラノフスキーでも歴史家ニブールに倣ってこのくらいのことは述べていたからである。ところがこの論文の後半分では後進国ロシアの歴史運動にとってまことに興味深々たることが論定されているのである。第二の論題に移ろう。

チェルヌィシェフスキーの提題はこうである，――以上の一般的概念の数ある中から，我々が述べた形式の継承性に関する現代科学〔人間学的唯物論〕の論述にただちに続くものは，一般的過程の個々の発現の各々が現実において，論理的モメントのすべてを，その力を全部発揮して通過しなければならないのかそれとも，ある時代とある場所における過程の成行に好都合な諸事情は，現実において，中間の諸モメントを全く経由せずに，もしくは少なくともその継

起を著しく短縮し，かつ，諸モメントのすべての目に感じられる強度を失なわせながら，その発展行程の最高段階に導き得ないか，という概念である，と（傍点―引用者）。簡単に言えば，発展には一連の論理的な継起的モメントがあるがそのいくつかの中間的モメントを短縮ないし経由せずして最高の論理的モメントに至り得ないかということである。彼はまず自然現象にこの問題解決を求めた，倒木が発火するまでには(1)湿気の浸透，(2)腐朽，(3)発酵，(4)枯乾，(5)黒色炭，(6)赤色炭，そして最後に発火の非常に長い漸次的過程を経由する。しかし，一旦マッチという最高の段階物が得られると，薪は倒木の如き長い漸次的燃焼過程を経ずともただちにマッチによって火がつけられた木端によって燃やすことができる。薪は自然倒木の如き論理的モメントのすべてを経過することは必ずしも必要でない，仮え論理的モメントすべてを経過しているにしろ，日常実践の上ではその一つ一つの経過を目撃できない。自然法則に則って作った人間の製作物（マッチ）は自然的経過を不必要とするのである。別言すれば歴史は後継者に遺骨をあてがうのでなく，頭蓋を遺すのである。彼は以上の事象から次のように定式化した，――

＜(1)　一定の過程が発展のある段階の一定の人間において達成された時，この段階の達成は他の人々において非常に促進的になされる。

(2)　この促進は，最高段階に達する必要のある人間と，それを既に達してしまった人間との接近を通じて行なわれる。

(3)　この促進は，発達過程がきわめて急速に，低い段階から中間段階をつっ走って最高の段階に至る点にある。

(4)　この促進にさいして，中間段階の過程は，ただ理論によってのみ明らかにされるものであり，つまり論理的諸モメントとして理論的実現をみるものであるが，ほとんど全くと言ってよいほど実在的実現をみないのである。

(5)　仮え，発展の急速な行程において省略されるこれらの中間段階が実在的実現をみたとしても，その量からしてほとんどわずかの規模のことであり，実践的意義からしてわずかの役目しか果さない＞，と。

彼はこの定式の歴史的事例として，後進国ニュージーランドと先進国イギリスとの接触を採り上げた。イギリス人は 150年もかかって自由貿易体系をつくったが，ニュージーランド人はこの長い年月を必要としない。後者は前者の影響下で保護貿易を経ずに直接自由主義的経済概念を直接に受容するからである。以上のことを数学的級数で表現するなら，1，2，4，8，16，32，64…→1，4，64，…となる。このことによってチェルヌィシェフスキーが示したかったことは，歴史を後から歩む民族が，一定の条件下で歴史の先行諸民族の全成果をすみやかに我がものとすることができ，後続者は先行者が必要とした時間を大幅に短縮することが出来るということである。これは真理である。人類の歴史は先人の事業を先人がなしたその通りに繰返して獲得するわけではないからである。先進国者の食卓の残パンを食べる後進国者は肥るということは真理である。さて，ロシアが後進国である以上，歴史の発展の最高段階に相当するものは具体的には西欧の資本主義諸国にほかならない。彼によれば，イギリスが最先端で，つぎがフランス，プロシアはイギリスとフランスとの中間，スペインはロシアと同じである。するとイギリスやフランスの文物をロシアは短期間に摂取できるという理屈である，別言すればロシアは西欧資本主義を短縮ないしは経由せずして待望の未来社会に移行できるという考想である。チェルヌィシェフスキーは，前述したように，共同体的土地所有 → 資本主義的私的土地所有 → 社会主義的共同体的土地所有の必然性をヘーゲル弁証法で解き明かしたが，今度は，「一定の条件」が許せば アンチテーゼとしての 資本主義的生産様式を西欧が歩んだ通りに歩まずに，むしろ短縮してジンテーゼとしての共同体に至り得る可能性が論理的に十分あり得るとしたのである。この「一定の条件」とは残存するロシアの共同体的土地所有と共同体的慣行・精神であることは言うまでもない。

ここで1857年の論壇月評 No. 4, No. 5 で表明された彼の問題意識を想起する必要があろう。彼によると，歴史の発展の第一期は共同体の時期であり，続く第二期は土地の私的所有のそれであり，最後のものは土地の共同体的社会主義

的所有で，形式からすれば第一期への復帰である。ロシアの経済活動は第一期から第二期へ急速に向い出しているが，もしやこの第二期に無暗矢鱈に突入してしまえば，「絶えず拡大しているプロレタリアートの潰瘍」をロシアにもたらすことは必至である。西欧資本主義の悪の轍を踏むことになる。幸いに，ロシアは土地の共同体的所有の制度と共同体的精神が「善」なる遺産として残っているので第二期の期間を出来得る限り短縮して第三期を迎えるのがロシア人民にとって得策である。仮に，この第二期を踏むとしてもロシアは20～30年ぐらいで十分である。何故ならば，ロシアはクリミア戦争以後，ロシアの経済活動は西欧化によって急速に進展しているから。このチェルヌィシェフスキーの問題意識の中には既にロシアは西欧資本主義を大幅に短縮できるという考想があった。この考想を堅固不動のものとしようとして，彼は論理の力を用いて論証したのである。

ところでチェルヌィシェフスキーが立てた第二の定式がヘーゲルによって述べられているとされる，――ヘーゲルは，中間的な論理的モメントはしばしば論理的モメントにとどまって客観的存在をえないと積極的に語っている。一定の中間的モメントが何時何処かで存在し得ることは十分にある。このことによってすべての他の時代と場所における発展過程は，それが現実的実現に至る必然性を免れるとヘーゲルは直接に述べている，と。これは註の形で述べられているが，筆者はヘーゲルのこのような言辞通りの箇処がどこにあるか知らない，少なくともヘーゲルの『歴史哲学講義』(1822～31）には見当らない。ヘーゲルの『歴史哲学』にあっては，世界史は世界精神の理性的且つ必然的論理的行程であり，いわゆる「自由の意識の進歩」を必然性において認識する行程である。その歴史は，『論理学』におけるように，an sich の歴史から für sich の歴史に，そして最後に an und für sich の歴史に進む弁証法的止揚 aufheben の過程である，この弁証法的止揚が何回となく繰返されて絶対理念の円環的運動を終結する。ヘーゲルによれば，自由の意識を内実とする世界史の止揚過程は，東洋（シナ，ペルシア）→ ギリシア・ローマ → ゲルマンとし

て具現する。つまり自由の概念の展開からみれば，一人の者の自由，精神の自然性に没入した状態 → 少数者の自由，精神が自由の意識へ進展した状態 → 人間が人間としてのすべての人の自由，自由の純粋な普遍性への高揚である。ゲルマン的プロテスタント的世界は歴史の最終段階であり，理念の自己展開は終結完了する。このゲルマン世界と先行世界との関係についてヘーゲルはこう考えていた，ゲルマン民族は，ギリシアやローマがしたように文化が成熟し完成した第二期の時にその力を国外に向けたのとは違い，まず内から洪水のように溢出して世界を席捲し，しかる後にはじめて外国の文化，外国の宗教，国家の組織，立法の刺戟をうけてその発展を開始した。彼らは外国のものを自分の中に摂取し，それを自分の中で克服し，消化することによって自分を打ち出した。しかしゲルマン世界の三時期は先行文化の反復の形をとる，第一期（5～9世紀）はいわばペルシア王国に比すべきものである，第二期（9～16世紀）はギリシアに対応し，第三期（16～19世紀の王政復古）はローマの世界と比較される。無論，この反復は先行時代の弁証法的止揚の形でなされる。確かにヘーゲルの論理からすれば，チェルヌィシェフスキーの定式は，ヘーゲルの論理の貫徹による帰結である。しかし，ヘーゲルには，後進国が一定の条件の下で先進国と接触すれば，ただちに後者の歴史的過程を短縮した上で新しい時代を創り得るという如き説はないのである。これはチェルヌィシェフスキー独自の想になるものである。ゲルツェンは共同体（オブシチナ）を母体にして百姓を革命勢力とする≪ロシア≫社会主義の定礎者であり，且つ「弁証法は革命の代数学である」と宣言した人であるが，しかしヘーゲル弁証法を駆使して，ロシアの社会主義が資本主義を短縮ないし経由せずに成立する必然性を論定しはしなかった。この点でもチェルヌィシェフスキーの定式は特異である。この定式は，確かにヘーゲルの論理の歴史発展への適用・貫徹であるにしろ，ロシアの国内状態がまともに反映されているものと言わなければならない。ロシアはクリミア戦惨敗後，急速に経済活動が活発になったとはいえ，いまだ農奴・専制的前近代のスタイルをとっているので，西欧諸国にみられる近代化をはからねばならない，

家父長制的生産様式を廃絶し，農奴法を廃棄し，専制の専横を拒否し，一刻も早く西欧の水準に達しなければならない。だが，しかし，西欧のマイナス面を断乎として拒否しなければならない，私的所有制に起因する諸悪，就中，プロレタリアートの発生をロシアは拒否しなければならない。ロシアの共同体とその精神は「プロレタリアートの潰瘍」の「唯一の救済手段」である。仮に，共同体が残存しているという考えがなかったら，チェルヌィシェフスキーがかの定式を打ち出したかどうか疑とするに十分である。資本主義を短縮可能であるとする考想の底には，ロシアの共同体的土地所有とその慣行・精神が社会主義的所有への移行を容易にするという彼の当初からの発想が横たわっているからである。彼は共同体的平等的所有の傾向が専らスラヴ種族やロシア種族のもつ国民的組織の何か内密な特徴ではないと言明しているが，共同体的所有を西欧がとうの昔に廃棄している以上，ロシア国民が世界のいずれの国にも先がけて社会主義に至ると考えていたことは否定すべくもない。この点をヘーゲルの『歴史哲学』との関係で見てみよう。周知の如く，ヘーゲルは彼が生きていた19世紀初頭の王政復古時代を，ヘーゲルの言葉で言えばゲルマンのキリスト教の世界を，精神の完全な成熟の世界として完結させた。チェルヌィシェフスキーは彼のこの保守的完結を看破していた。彼はヘーゲルが終結させた王政復古の時代のフランスの空想社会主義を起点に，1848年革命とその社会主義者の思想を挺子として自己の思想を開始したのである。世界は完結しているどころか，それを否定して未来社会を構想しなければならないのである。従ってチェルヌィシェフスキーの歴史哲学はロシア的色彩を濃くしているが，ヘーゲルのように歴史を閉じたものとしたのではなく，歴史を未来に向って開いたのである。

以上，『共同体所有に反対する哲学的偏見の批判』を中心において彼の歴史の哲学を論じてきたが，もしこれで彼の歴史哲学の特徴付けを終るとするならそれこそチェルヌィシェフスキー自身の意図にも悖り，ひいては彼の歴史哲学の内容を歪曲することになるだろう。彼はこの論文でこう言っている，――その属性が共同体的所有でなければならない最高段階は，現時点において我国

の文明化によって実際に達成され得るであろうか。この問――一般的世界的諸法則からの論理的帰結や結論の助けによってではなくて，諸事実の分析によってもう解決されている――は，共同体について扱った以前の論文で，我々によって部分的に考察された。そしてこれから先の諸論文でもって完全に再度研究されるであろう。これらの論文は西欧及び我国ロシアの農耕についての特別の資料の叙述に当てられよう，と（傍点――引用者）。ここで言う後続の諸論文とは，経済学上の偏見を批判した『経済活動と立法』，『論理規則と迷信』，社会主義的同胞体構想を打ち出した『資本と労働』，『ミル「経済学原理」露訳とその評言』などの一連の社会哲学（経済学）の論作である。これらの諸論作は，まさしく西欧資本主義経済の事実分析であって，この分析の深度がチェルヌィシェフスキーの従来の「歴史哲学」からの脱皮の度合を指標するものである。

＝つづく＝

使用テキスト

Н. Г. Чернышевский: Полное собрание сочинений, в пятнадцати томах, Дополнительный том, 1939-1953. Государственное издательство художественной литературы, Москва.